

勝林寺寺報

一切群生蒙光照



春のお彼岸も終わり日が少しずつ長くなり、太陽の光が山にも川にも、鳥にも木々にも分け隔てなく暖かく降り注いでいます。長い冬があつてこそ、この暖かさはなお一層うれしくあります。

親鸞聖人は阿弥陀如来様を、私を照らす〈光の仏様〉としてとらえられています。

太陽の光のように、その量に限りがない無量光

届くところに際限がない無辺光

避けようとしても妨げられない無碍光

他と競い比べようもない無対光

力強い炎のように私たちを守る炎王光

夜空のお月さまのように混ざるものはない澄みわたった清淨光

全てのものに喜びを与える歓喜光

暗闇に沈む無知を目覚めさせる智慧光

途切れることなく常に私を照らす不斷光

人の浅知恵で考えても理解することのできない不可思議光

人の経験で名付けて呼ぼうとしても的外れになつてしまふ無称光

太陽の光や、月の光のすばらしさをはるかにしのぐ超日月光

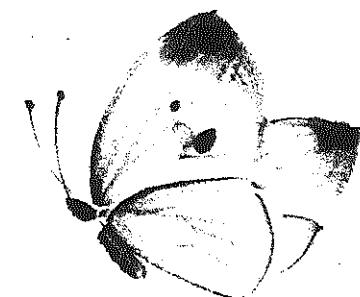
お正信偈にも出てくる一二の光です。仏の光

はこの一二の性格をもつて私たちをいつも照らしています。おおむねお日様の光やお月さまの光に似ているところが多いのだと思いますが、地下一〇〇メートルに埋もれた核シェルターの中にでも〈無碍光〉はとどき、一〇〇〇年間の暗闇を一瞬にして破り、光の世界としてしまうのが仏さまの光です。

私たちも永い生を重ねる中で、無明の闇の中に埋もれ、貪り、怒り、嫉み、憎しみ、争い合ひ、奪い合つて生きています。そうしたことすべが無明のなせる業であり、つもりに積もつた宿業に埋もれた無明の世界を普く照らし、仏の光の世界に導きだしてくれるのがお念佛です。

長い冬の雪に閉ざされた野や山に降り注ぐ春の陽光は、フキノトウにもスズメにも縁側で昼寝するノラ猫たちにも優しく豊かで心を和めます。そして、そこから流れ出したたくさんの清らかな山水が、この後の季節に大きな恵みをもたらしてくれるものと予感されるのです。

(文責 住職)



觀桜会のお説い

あたたかくなりました。お出かけしましよう。

おしゃべりしましよう。体を動かしましよう。

笑いましょう。歌いましょう。仏さまのお話を聞きましたよ。お待ちしています。

平成三十年四月一四日(土)

第一部 グランドゴルフ大会

場所 出石いきいきドーム(弘原)

時間 午後二時開会

六日(金) 韓国研修旅行

七日(土) 出石組 組会

四日(水) 永井道則宅 忌明法要

五日(木) 韓国研修旅行

六日(金) 韓国研修旅行

七日(土) 出石組 組会

八日(日) 澤田 還仏式

九日(月) 勝林寺 観桜会

一〇日(火) 勝林寺 観桜会

一一日(水) 山田輝幸宅 忌明法要

一二日(木) 出石組連研 役員会

一二日(土) シカバレー 五周年記念

一三日(日) 順光寺 親鸞聖人大遠忌法要

一四日(月) 勝林寺 観桜会

一五日(火) 山田輝幸宅 忌明法要

一六日(水) 出石組連研 役員会

一七日(木) シカバレー 五周年記念

一八日(金) 順光寺 親鸞聖人大遠忌法要

・堂内に桜あり

・出し物大歓迎

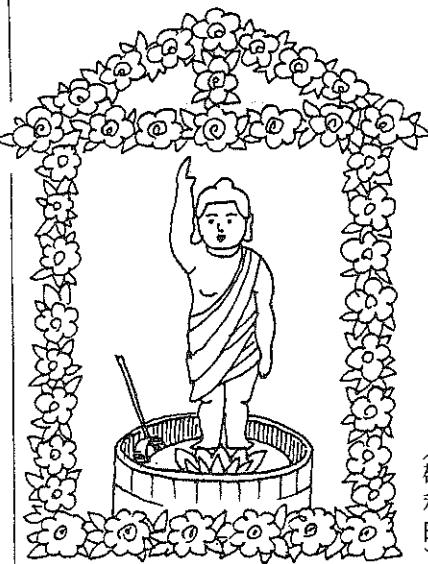
*申し込みは、地区仏婦評議員さんに取りまとめていただきます。

二六日(木) みのりを聞く会

二八日(土) 玉井妙子宅 一周忌

入学おめでとう

四月から小学校に入学される四人の皆さん、「入学おめでとうございます。皆さんが、豊かで実り多い学校生活を送られます様、勝林寺一同で念じています。



(敬称略)

但東町栗尾 兼井結生さん (隆雄様宅)
但東町栗尾 兼井すみれさん (隆雄様宅)
出石町日野辺 坂本美空さん (剛志様宅)
出石町桐野 奥地かのんさん (兼男様宅)

四月 勝林寺 予定

一日(日) 光顕寺 永代経

渋谷厚志宅 一周忌

仏教会 役員会

真珠の貝に学ぶ

親鸞さまが教えられた真実信心とは、私が私の心を育てるこことによって、仏さまに出遇うという体験をいいます。ここで仏さまに出遇うと、いうことは、この私が、仏の慈悲に包まれているということを、確かに実感することを意味します。仏の慈悲とは、その慈とは、インドの言葉ではマイトリーといい、切っても切れないつながりのことです。またその悲とは、インドのことばではカルナーといい、うめくということを意味します。だから私が仏の慈悲に包まれるということは、仏と私とは、かたいつながりに結ばれているということ、仏は私を包んで、いつもいつも、うめいでいるということをあらわします。ところで、仏はなぜうめいでおられるのか。

ずっと昔、娘を連れて三重県志摩の海岸に遊び、そこにある御木本真珠養殖場を見学したことがあります。あの美しく輝く真珠の多くは、ここで育てられているのですが、それは先ず真珠の母貝（あこや貝）を育てて、その貝が一人前になると、それを海から引きあげて、少しだけその殻をこじ開け、その中に小さな石粒を入れます。そしてその貝をカゴの中に入れて、再び海にもどします。そうすると数年のうちに、その母貝の中に真珠が育つのです。

どうして、あのような美しい真珠が生まれてくるのか。実は母貝に石粒を入れると、貝の中は柔らかい内臓だけで、石粒は全くの異質物です。だから貝が動くと、その石粒が内臓にふれて、とても痛いわけです。そこで貝は、今まで自分の殻を大きくするために廻していた養分を、その石粒に巻き付けて、それを自分に同化させようとするわけです。したがって、あの美しく輝く真珠とは、母貝が痛みに耐えかねて、泣く

泣く自分の生命を削りながら、作り上げたものなのです。

私は、このような真珠養殖の現場を見学しました。時に、仏の心が大悲、カルナーとして、うめいでいるということを思い出しました。真珠の母貝が仏まで、その中の石粒が私です。仏の心に包まれた私の生命は、恐ろしい地獄の生命でしかなく、仏の生命に比べれば全くの異質物です。私の毎日のおろかな生きざまは、そのまま仏の心を限りなく痛め続けているわけです。私はその時、真珠ができるまでの話を聞きながら、仏がうめいでいるということを、改めて思い知り、深い感動をおぼえたことです。

私が仏を信じる、仏に出遇う経験とは、このように、真珠の母貝の中の石粒として、大きく温かい仏の心に、いつもいつも、しっかりと抱かれているということを、確かに実感する」ということです。

私が仏を信じる、仏に出遇う経験とは、「えしん」と読み、もともとの心をあらためて正しい仏道に向かうことを行いますが、浄土真宗では、今月の言葉のように、自力の心をすべて他人に帰することを「回心」というのです。いずれにしても「回心」という言葉は、これまでの自己の持っていた価値観が崩れ、まったく新しい価値観が誕生することによって、人格の内面が変化することであるといえます。その意味で、「回心」とは、「自分自身が生まれかわった」というべき信体験をすることで、「歎異抄」第一六条には、「一向専修のひとにおいては、回心といふこと、ただひとたびあるべし」と言われているように、人生におけるただ一度の「ターニングポイント」というべき重大な出来事なのです。

親鸞聖人にとつて「回心」とはいつたいどのようなものだったのでしようか。「教行信証」（化身土文類）後序に「恩禪釋の巻」と自らの名を名乗り、「建仁辛酉の暦」とその時も示して、「雑行を棄てて本願に帰す」と自らの回心について記されています。この時、二〇〇年もの間学業修行をされた比叡山に別れを告げ、吉水の法然聖人のもとに行く決意をされた、というのです。親鸞聖人にとって、「他力」とは「自力」をはなれることであり、本願他力のほかに、ほかのことを並べないことであったことがわかります。つまり「自力・他力」とは、一般に理解されているように「自の力・他の力」という意味でもなく、「自力と他力とがあいまって、仏さまの救いを受ける」というものでもなかつたのです。

ひるがえし すゝると、どうなり

今月の言葉は、親鸞聖人の著作「唯信鈔文意」の一節です。「回心（えしん）」という言葉は、一般的には「かいしん」と読み、これまでの誤った心を改めることを言い、「改心」と同じ意味で用いることもあります。仏教ではこれを「えしん」と読み、もともとの心をあらためて正し

い仏道に向かうことを行いますが、浄土真宗では、今月の言葉のように、自力の心をすべて他人に帰することを「回心」というのです。いず

れにしても「回心」という言葉は、これまでの

自分自身が生まれかわった」というべき信体験をすることで、「歎異抄」第一六

条には、「一向専修のひとにおいては、回心といふこと、ただひとたびあるべし」と言われているように、人生におけるただ一度の「ターニングポイント」というべき重大な出来事なのです。

親鸞聖人にとつて「回心」とはいつたいどのようなものだったのでしようか。「教行信証」（化身土文類）後序に「恩禪釋の巻」と自らの名を名乗り、「建仁辛酉の暦」とその時も示して、「雑行を棄てて本願に帰す」と自らの回心について記されています。この時、二〇〇年もの間学業修行をされた比叡山に別れを告げ、吉水の法然聖人のもとに行く決意をされた、というのです。親鸞聖人にとって、「他力」とは「自力」をはなれることであり、本願他力のほかに、ほかのことを並べないことであったことがわかります。つまり「自力・他力」とは、一般に理解されているように「自の力・他の力」という意味でもなく、「自力と他力とがあいまって、仏さまの救いを受ける」というものでもなかつたのです。

どすん

雨は、いつの時もちょっと残念な扱われ方をしますが、いいこともあります。

一つには、雨音に心を落ち着かせるヒーリング

効果があり、脳をとてもリラックスさせてくれるそうです。二つには、雨上がりにはマイナスイオンが発生し、体を酸性にする活性酸素を取り除き、疲れをとつたり、精神を落ち着かせたりするそうです。そういうえば、雨音を聞きながら、集まってくださった門徒の皆さんと一緒に、お聴聞させていただいているとき（ひょつとしたら晴れた日に聴聞するより、雨降りの方方が心にたまっているかもしれない）と思えました。ちょうど雨の日に、庭に取り残されたバケツの上に降る雨が、その中にしてたまつていく光景と重なるような気がしたのは、以前聞いたお話が思い出されたからでしょう。

ある時、お聞かせていただいた話の中で、講師先生が「信じるとは、自分に蓋をしないこと、自分に都合のいいことも悪いこともすべてを受け入れるということです。逆に、信じないとは、蓋をすることと、完全に自分を閉ざしてしまったり、そこまでしなくても、自分にとつて都合の良いことだけを通す蓋をするのです」と聞かせていただきました。「信じる」という言葉の持つ重みが心にすとんと落ちた気がしました。

雨音と一緒に聞かせていただいた彼岸会の仏さまのお話は、皆さんの中の蓋のない大きなバケツの中に、今まで聴聞してきたお話のようにゆっくりとたまつていったことでしょう。「雨つていいな」人生初めて、しみじみ思つたことでした。

勝林寺に春の訪れを告げるはずだった「仏婦総会」と「彼岸会」は、よく雨の降る寒い日になつてしましました。にもかかわらず、多くの方の出席、お参りで本堂はやっぱり「春」でした。



（信楽峻磨遺稿法語集より引用）

親鸞聖人にとって、「他力」とは「自力」をはなれることであり、本願他力のほかに、ほかのことを並べることであったことがわかります。つまり「自力・他力」とは、一般に理解されているように「自の力・他の力」という意味でもなく、「自力と他力とがあいまって、仏さまの救いを受ける」というものでもなかつたのです。

（文責 坊守）